



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学総合博物館ニュース
Author(s)	藤田, 正一
Citation	北海道大学総合博物館ニュース, 9
Issue Date	2004-07
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/59476
Type	book
File Information	hakubutsukan9.pdf





THE HOKKAIDO UNIVERSITY MUSEUM NEWS

北海道大学
総合博物館ニュース

特集「北大総合博物館への期待 I」

すべてが博物館

北大に程近い女子短大に通っておりまして頃、土曜の夕には決まって、少し遠回りして北大構内を通らせて頂いていました。土曜の午後、茶道部を終えたばかりの静かな心のまま、この一週間に学んだことや思いの内を振り返るようにして18条から正門までの道をゆっくりと歩きました。キャンパス内の季節の移ろいを感じつつ、勉強や人生についての思索を重ねた、宛ら「哲学の道」のようでもありました。その時に感じていたのは、なにかしら磁力のように惹き付けられる北大全体に漂う場の力でした。それは何故なのか、その頃まだよくわからずにいたのですが、今になって思いますに、北大の深層に流れ続ける確かで強い何かの気配を、若輩の身ながら感じていたのだと思います。

*

初めて大きな博物館を訪れましたのは、小学6年生の頃だったと思います。北海道開拓記念館でした。天井が高く、広く静かで厳かな館内の雰囲気と、そうした空間に配された展示物への驚きの心境を大変印象深いものとしてよく覚えています。その折には、「出来ればもっと時間をかけて見たい、また何度でも訪ねてみたい」とも強く感じました。このように強い印象を受けた博物館は、当時の道内では開拓記念館だけであったように記憶しています。けれども本当に残念なことに、住居区からは遠く離れていましたこともあり、その後度々お伺いすることの叶わないままになりました。

そうしたことを思い出しつつ北大総合博物館のことを考えます時、その居地は本当

にすばらしいと思っています。札幌の街中にありながら、キャンパスの緑に包まれた博物館へは、幅広い年代の方々も容易に足を運ぶことができそうです。特に札幌市民にとりまして「いつでも、何度でも訪ねられる」と感じられることの意味は大変に大きいと思います。そして市民にとりましての大学博物館は、その大学を感じさせてくださる入口のような存在であるとも思います。大学博物館、北海道大学であるところの博物館に静かに思いを深めています。

初めて開拓記念館を訪ねました時には、過去からの呼びかけとも申せましょうが、時の流れに籠められた深淵さのようなものを強く感じました。

北大総合博物館には、過去と今と未来とが同居し、そして現在進行形でいらっしゃる別棟にお出での多くの研究者・教育者の皆さまの確かな存在を感じつつ、到底博物館内の展示には収まりきれないほどでありましょうその莫大な様々の、間口の広さと奥行の深さを強く感じさせられました。

そして、札幌農学校に始まる北大の建学の精神に思いを馳せました。自らの学生時代の心風景をも思い出しつつ、建学の精神や歴史を知ることにより新たな思いが生まれ育ち、長い時をかけて紡がれるものがあることを思います。「広きこと、深きこと」が両立し、展示や展示物によるのだけではなく、物からの力と共に人の力、精神の力をも強く感じさせてくださる北大総合博物館と、北大全体に潜在する底力を強く思います。

そのようにして考えますとき、北大総合博物館というものを大学全体でどのよ

うに捉えられ、学内でどのように位置付けられ、博物館の姿を今後どのようなものとしてお考えになれるのか、「北大全学としての意志」が博物館の全体像や将来像を左右して行くことになるように思いました。また、個々の皆さまのお心を少し思いました。博物館を歴史的資料や収集物等の保管・展示などを始めとする場所や概念の内に捉えられるのか、各学部から切り離された存在としてお考えになれるのか、

(次ページにつづく)

目次

- ページ1: すべてが博物館 (土井茂子)
- ページ2: 北大総合博物館に期待するもの (加藤 克)
- ページ4: 内なる期待 (高橋英樹)
- ページ5: 第7回企画展示「きのこの自然史」 (小林孝人・高橋英樹)
第8回企画展示「北大の情景 北海道大学写真部写真展」 (高橋英樹)
第9回企画展示「小樽・札幌・北大キャンパスの外來植物—生物多様性と移入種問題」 (高橋英樹・阿部剛史)
- ページ6: 第10回企画展示「書とスケッチで綴る『都ぞ弥生』展」 (藤田正一)
北大理学部教授室「N123 (中谷宇吉郎研究室)」の復元展示について (松枝大治・山崎敏晴)
- ページ8: 第8回公開シンポジウム「深海魚の多様性」 (今村 央)
佐瀬秀男氏樺太植物標本の寄贈 (高橋英樹)
客員教授紹介 (箕浦名知男)
- ページ9: 平成15年10月から平成16年3月までにおこなった各種セミナー企画展示のお知らせ
- ページ10: 平成15年10月から平成16年3月までの主な出来事/お知らせ

Jul. 2004

ISSUE 9

北海道大学総合博物館

2004年7月発行

或いはそうではないものとしてお考えになれるのか、大学博物館の概念や役割をも含め、大学人皆さまの其々のお心もまた、博物館の今後の姿を思う上で大変に重要なことに思われます。

*

内村鑑三は1926年に、北大50周年に寄せ次のような言葉を残してお出です。

「明治の初年において、私どもが北海道について抱いた理想は、はなはだ高いものでありました。それは此処札幌を、日本第一の収獲地、ならびに精神の修養地と為さんことでありました。しかしながら今日に至って事実如何にと観察すれば、理想は何れも裏切られたのであります。北海道は日本を浄化するどころか、かえって内地の俗化するところとなりました。今や日本中で北海道ほど俗人の跋扈（ばっこ）するところはないと思います。また札幌が大学の所在地となったことは事実ですが、しかしながら札幌の地が学生を養成するのに最も良き地であるかは、今は大なる疑問であります。天然的に最も恵まれた札幌は今や官僚化され、商人化されて学生生活を送るには、はなはだ悪い所となりました。

札幌が出したものは多数の従順なる官僚、利益にたけたる実業家、または温良の紳士であります。しかれども、正義に燃え、真理を熱愛し、社会人類の為に犠牲たらんとする人物は一人も出しません。積極的の大人物ではありません。進んで善事を及ぼさんと致しません。主として消極的の人間であります。私はクラーク先生の精神は札幌に残っているとは思いません。残っているのは先生の名であります。しかし、それだけのことであります。先生の自由の精神、信仰は今の札幌にはありません。札幌は先生のボーイズ・ビー・アンビシャスの広い意味において、これを知りません。」

札幌がまだ北の小さな町でした頃より、

北大（札幌農学校）も北大生の皆さまも、札幌市民には大変身近で日々敬愛されますような存在であられました由、お聞きしています。札幌市民憲章もまた、「わたしたちは、時計台の鐘がなる札幌の市民です」から始まります。その町も随分と大きくなりました。或いは少し大きくなり過ぎたかもしれません。大きくなった札幌の町で、北大と市民の近しさは昔に比べて如何なのでしょう。古の情景を思い浮かべています。

キャンパス内には新しい建物も少しずつ増し加えられ、内実共に変化を続けておられます。その中であってモデルバーンや旧理学部で在られる博物館などは、何か古老にも似た古き味わいによる輝きを一層深められているようにも思います。博物館内の階段をゆっくりと上がり、立ち止まって美しいアインシュタインドームを見上げました。3階は、化石や標本等からの無言の投げ掛けを感じさせて下さる空間になっているように思われました。パネル展示や映像とはまた異なる、なにか想像力を掻きたてられるような展示空間に心が惹かれました。少し無骨で、媚びることなく、どこか荒削りで、その実とても細やかで、そうして人の温もりや優しさ、人間味をもとても感じさせてくださるような展示の放つ力を強く感じています。それは何かそのまま「北海道大学の姿」のようにも思われました。他の博物館や他大学の博物館に学びながらも、決して横並びではなく、北海道大学独自の概念に基きその持味を充分に生かされた博物館になられますようにと思います。

博物館の裏側で見せて頂いた沢山の保存箱や引き出しの中には、様々なものがぎっしりと詰っていました。北大全体の引き出しには、一体どれだけの叡智が詰まっているのだろうと思います。博物館は「知」の場

所ではありますけれど、同時に「感じる」場所であることをとても思います。大学と市民の、そしてまた大学全体の結びつきを更に深められるものとしての北大総合博物館の今後の姿を静かに思いました。

*

キャンパス内には今年サクシュコトニ川が復元されました由、北大の深層に流れて静かに大学全体を潤し続けるような確かで強い何ものかもまた、今後は一層目に見えるような水の流れとなられるのでしょうか。博物館はその史実において時に、権力の象徴や強者の支配とも深く関わりあう存在でもありましたように思います。けれども、北海道大学と北大総合博物館には、「知より智へ」新たなる創造力による平和の力を望みます。

一北大はすべてが博物館一。キャンパス内を今も時に歩かせて頂きながら、静かにその思いを深めています。

土井茂子

（遠友学舎「クラーク講座」受講生）



アインシュタインドーム

北大総合博物館に 期待するもの

『隣の研究室にあったネズミの液浸標本、あれを今DNA調査できればなあ』

先日、藤田総合博物館館長と話をした際におっしゃられた一言である。この一言に大学博物館の目指すべき役割の一部が端的に現れていると思われるので、ここに引用させていただくこととした。

博物館について話をする際に、いつも同じ質問をする。「博物館が地球上からなくなったら、どうなるだろうか?」。多くの人は、「特別展にいけなくなる」や「公開講

座が開かれなくなる」といった回答をするが、実はそんな問題ではない。

中学・高校の日本史の教科書を開いてみよう。そこに記された藤原道長や織田信長の名前はなぜそこに記されているのだろうか。なぜ平安京への遷都が794年とわかるのだろうか。それは、博物館や資料館などの施設にその事実が記された証拠が残っているからに他ならない。地域の小さな歴史であっても同じである。文献なりモノなりがどこかに証拠として保管されていなければ、多くの人に共有される事実としてはみなされないであろう。自然史においても同様である。ある鳥を「シマフクロウ」として私たちが共通に認識するためには、写真や文献が役に立つこともあるが、突き詰め

てゆけば、「シマフクロウ」という種を確定したある標本（タイプ標本）が博物館に存在していなければ、同じ種を同じものとして共通に認識することは難しいであろう。また、現在日本産のトキは絶滅してしまっただが、明治時代には北海道にも生息していたことが古い記録に残されている。しかし、その記録に残されている鳥が、本当にトキであると証明してくれるものは何であろう。やはり、博物館に残されている標本が動かぬ証拠となってくれるのである。

このように、博物館は一般に認識される役割である「展示」以外に、貴重な証拠資料を全世界の人々の財産として保管し続けるという社会貢献を果たしている。博物館がなくなったとしたら、遠い異国の文化遺

産が見られなくなるといったことよりも、私たちの生活そのものが、文化的なものでなくなってしまうだろう。このような博物館の役割に、もっと目を向けていただきたいものである。

さて、博物館に保存される資料とは、実際どんなものなのだろうか。古文書を例にとってみよう。現存する史料は、土地の売買証文や家の伝統を子孫に伝えるために書き継がれた日記などが多い。それは、自分の権利や地位を守るために残す、という強い意志が働いているからにほかならない。史料を保存していた寺院や貴族は、自分たちの権利のために保存していたのであり、日本の歴史を描こうとして残していたわけではないので、必要のないものは処分されてしまっている。現在博物館などに保管されている史料は、貴重なものではあるが、そのままでは歴史のある一面しか提供してくれないのである。私たちが知っている歴史は、これらの史料をそのまま読んだだけで成り立っているのではない。残された日記の紙の裏側には、将来にわたって残さなくてもよい内輪話が書かれている手紙が残っていることもあるし、歴史書には名前が出てこない農民の切なる訴えが書かれていることもある。特定の目的の下で保存された史料をそのまま受容するだけではなく、時には裏がえし、時にはつなぎ合わせて利用したときに、生き生きとした本当の歴史が浮かび上がってくるのである。

ここで冒頭の藤田館長の言葉を思い返してみよう。本来、ある研究目的で収集された液浸標本は、決して藤田館長のために収集されたものではなく、DNA が採取されることなど想定されていなかったに違いない。必要がなくなった以上、廃棄するのは仕方のないことである。しかし、それが博物館の標本となるまで残っていたらばどうだろう。標本が適切に保存され、その利用方法が展示や、過去に行われた研究の顕彰に限定されることなく、利用できる環境にあったとしたならば、藤田館長の研究はさらに進み、新しい歴史が描かれたに違いないと思うのである。

北海道大学では、一線の研究で利用された標本や資料が日々生み出されている。これらは、素性のきわめてはっきりした、それ自体で非常に価値のあるものであるが、それらの標本をバーチャル画像ではなく、実際に手に触れ、素材を調べたり、時には切ったり、削ったりと、それぞれが望む利用ができるならば、後に続く研究者たちにとってこれほど恵まれた研究環境はないだろう。藤田館長が残念に思ったことを、50年、100年後の後輩たちが同じ思いをしなくてすむようにすること、これが大学博物

館の目指す方向なのではないだろうか。総合博物館が「研究資源の宝庫」となり、世界中の研究者が、北大総合博物館がなければ研究が成り立たないというところまで成長していただきたいと願う。

*

ところで、総合博物館が「研究資源の宝庫」となるためには、超えなければならないハードルがある。そのハードルは、「人」である。

生み出された標本や資料が、あらゆる研究利用者の研究資源となるためには、磨いてやらなければならない。ある目的で生み出された標本は、別の利用に耐えられるようにさまざまな情報・価値を付与してやらなければならない。当初の目的以外での利用はしづらいものである。生み出された標本が有する当初の価値・形態を保持、あるいは復元できるようにすることが前提であるが、その枠組みを取り外し、そのほかの標本たちと同じ土俵に立って利用することができるようになったとき、真の研究資源に生まれ変わるのである。

資料の価値を保存しながら、磨くという作業を考えたときに、必要なものは「資料を利用する」立場ではなく、「資料を利用させる」立場で働くことができる人である。あらゆる利用に耐えうるように資料を管理するためには、自身の研究成果よりも他者の成果を優先しなければならない。また、資料は利用されればされるほど、新しい価値が付け加えられるので、日々更新される情報も適切に管理しなければならない。さらに、利用されれば破損することもあると予想される。将来にわたって資料が適正に利用され続けるためには、修復・保存管理の役割も必要になってくるだろう。「資料を利用させる」立場で働く存在があってこそ、博物館は永続的な「研究資源の宝庫」となりうるのである。

写真は、植物園博物館に所蔵されている

標本をアメリカの博物館に貸し出した後、返却時に梱包されていた箱である。箱の中の標本も1点1点きちんと梱包して返却されてきた。こちらが送ったときよりも、よりよい状態で返却されたとき、その博物館への信頼が生まれる。逆であれば、次からは貸し出そうとも思わないであろう。他館の資料を大事にするためには、まず自館の資料を適切に扱えるようにならなくてはならない。北大総合博物館が世界中から信頼される資料管理体制をしいたとき、当初の目的を終えた標本が新たな役割を果たすために集まってくる。また、その資料管理体制が大学全体を覆ったとき、生み出される資料の質もより高まることだろう。質の高い資料管理を行う機関であれば、自らが保有する資料だけではなく、世界中の資料を借用する窓口ともなりうる。研究者としての個人の交流ではなく、資料管理機関として他館との交流が進めば、北大の研究者はまず総合博物館に行き、基本的な情報を得ることができるようになるだろう。5人の資料管理スタッフがいれば、100人、1000人の研究環境が整備される。大学にとって博物館に投資することは、長い目で見れば、学内全体の学生・研究者の研究環境の充実に投資することにつながる。早急に人員を配置していただきたいと願う。

しかし、そのような人材は、どこにいるのだろうか。日本では、保存科学や資料管理に携わる人材を養成する機関は、ほとんどといってよいほど整備されていない。現在北海道大学で設置が検討されている文書館に求められる専門職員（アーキビスト）の養成も同様である。ロースクールやビジネススクールと同じように、北海道大学が率先してこのような専門的な能力を持った人材を輩出できるように総合博物館や文書館の体勢を整えることができるならば、日本の博物館・文書館の人材養成の中心的存在になることだろう。大学の独自性が求め



アメリカの博物館から返却された標本の梱包

られている昨今、どこの大学も始めていることをできる可能性を有しているのも、総合博物館である。

＊

北海道大学は120余年の歴史を有する。その歴史との中で生み出された標本の数々は、どれだけお金が潤沢にあっても購入することができない宝である。120年前の標本・資料を、今の私たちが利用できるという幸せな環境は、我々の先人たちが築き上げてくれたからに他ならない。120年後の後輩たちが私たち以上に幸せな環境で研究できるようにすること、これが総合博物館に求められている最大の役割であると思う。予算や人員の問題で必ずしも最良の活動はできないかもしれ

ない。しかし、この最大の役割を果たすべく、できる限りの活動を進めるという強い意思を持ち続けることが、全学からの協力を得る近道だと思う。

＊

最後に、総合博物館における展示について述べたい。博物館における展示とは、収蔵している資料などを利用して、あるテーマにまとめて提示するという役割を担っている。この役割は、博物館という存在を支えてくれている人々に対して、その活動の成果をわかりやすく提示する手段であるといってもよいだろう。大学博物館の活動とは、大学の広告塔ではなく、研究教育機関として、全学の研究教育に貢献することである。総合博物館が全学

的に利用され、そこから生み出された新たな研究結果こそが、大学博物館の活動の成果であり、それを提示することが大学博物館の展示の目指すべき方向であろう。にもかかわらず、収蔵庫の整備は遅々として進まず、総合博物館の本来の活動は停滞せざるを得ない状況である。過去の遺産を食い潰すだけの展示では、いつか破綻をきたす。博物館の基礎を固める時期であると考え、展示よりも収蔵庫での資料管理や研究利用環境の整備などを優先して活動していただきたいと思います。

加藤 克

(北方生物圏フィールド科学センター植物園博物館助手／日本史・資料管理学)

内なる期待

1999年に北大総合博物館が設置された。学術標本・資料を永久に良好な状態で保管できる場所として、また北大の教育・研究の現状を広く社会に発信する場所として、学内の関係者からも期待され、また新たに配置された教職員も大きな希望を抱いた。この当時、日本の主要な国立大学に大学博物館を設置しようとの「風」が吹いていた。5年経ち今周りを見回してみると、この「風」は凪いでしまったようだ。当初構想された2005年度全館オープンは来年度だが、この用途は、立っていない。設置はされたが完成していない施設である。

昨年末には、総合博物館として整備予定だった旧理学部本館のかかなりの面積を、学内施設改修に伴う「一時逃げ場」として使いたいという案まで大学本部から提示された。このような状況に至って、北大の伝統的な学術研究を支えてきたと自負する学内の研究者も黙っていられなくなった。2003年12月にこのような有志、学内31名の教員の連名で総長、副学長、館長、事務局長宛てに以下の嘆願書を提出した。

＊

学術標本・資料は文献資料と同様に、大学の教育研究上なくてはならない貴重な財産です。図書館や現在構想されている文書館と同様に博物館の整備状況は大学の学術レベルを示す指標でもあります。

学術標本・資料はそれを用いた研究の再検証可能性を保証するという意味で自然史や考古・人文系の研究において第一義的に重要です。標本は「もの」そのものであり、新しい研究手段の開発・導入により、学術上の新たな知見が標本から得られることも少なくありません。我々は現在の研究教育に標本・資料を活用しているだけ

でなく、将来の検証や新たな発見のための源泉として標本・資料を維持管理し整理を進め、次代の研究者に引き渡す責務があります。

北大は127年の歴史を通じて貴重な標本群を蓄積してきました。現在400万点の学術標本があり、うち1万点がタイプ標本(生物や古生物、鉱物等の命名の基礎になった標本)であり、世界でもトップレベルの大コレクションです。平成15年度には「新・自然史科学創成」として、これら学術標本を基盤とした研究教育プロジェクトが21世紀COEとして採択され、貴重な学術標本を利活用した研究教育の抜本的な進展も期待されています。また、生物標本だけに限ってみても、生物多様性条約の締結国として、生物多様性保全を推進する先進国の責務として、多様性認識の基礎資料である学術標本の重要性も強く認識されねばならないことです。

残念なことにこれまでに総合博物館に移動された標本群はまだ一部であり、大部分は農学研究科、理学研究科、水産科学研究科、獣医学研究科、工学研究科、医学研究科、文学研究科等の在来部局に分散・保管されています。さらに大変憂慮されることにこれらの中にはプレハブ等劣悪な環境で仮収蔵されたままになっている標本があり、利活用に大きな支障を与え、貴重標本の劣化さえも進行しています。

北大総合博物館は、学内の学術上貴重な標本群を適正に集中管理し、整理を進めて世界の研究者に利活用されることを大きな目的の一つとして、北大評議会の議決を経て1999年に文部省(当時)より設置が認められました。その後2001年の北大創基125周年記念の一般公開展示として第1期工事はおこなわれたものの、本格的な学術標本庫(研究展示室)整備を含む第2・3期工事は行われないうままとなり、由

緒ある博物館の建物(昭和4年竣工)は改修の目途も立っていません。

その上最近になって、学内の改修工事の際の避難場所として総合博物館を長期にわたって利用するとの案が検討されていると聞き及びました。このような大学本部の考えには、学内の学術標本・資料の維持管理にあたってきた者として、大きな憂慮を抱かざるを得ません。これが大学法人化に伴う基礎科学軽視の兆しでないことを祈ります。北大の学術標本群は人類の宝です。北大が新世紀における「知の伝承・実証の拠点」を標榜するならば、総長、副学長、館長の諸先生や事務部門の責任ある方には十分な熟慮の上、大学の貴重な標本群を適正に管理し整理を進め利活用を進展させるため、計画通りに総合博物館の整備を進めるよう強く要望いたします。

平成15年12月4日

＊

この嘆願書を提出したお陰か、平成16年にはいって学内の劣悪な環境で仮収蔵されていた標本群の一部は緊急避難的に旧理学部本館の未改修部分に移動することができた。しかし本格的な学術標本庫整備の用途は立っていない。

昨年度までに61回のセミナーをおこない、10回の企画展示を開催した本博物館の活動量は国内大学博物館屈指のものである。入学式の折りに本館を訪れ、通底する精神の展示を見て、納得された様子で帰られる父兄を見れば、北大にとって総合博物館がどれだけかけがえのないものになっているかが分かる。

当初計画から遅くない時期に総合博物館の全館オープンが成されるように期待している。

高橋英樹

(研究部教授／植物体系学)

第7回企画展示 「きのこの自然史」

平成15年10月6日(月)～11月1日(土)の期間、第7回企画展示として「きのこの自然史」を北海道大学総合博物館1F「知の統合」コーナーで開催しました。

キノコは山菜や食材として、また最近では健康食品などにも利用される我々現代生活にも密着した生物ですが、植物なのか菌類なのかといった基本的な事を知らない人も多く、また分類学的な知見に関してほとんどの人が興味を払わないでいます。本展示ではキノコの生物分類

学的な側面にスポットをあて、分類研究の歴史や現状についての理解を深めることを目的としました。特に、日本の菌類分類学研究への北大菌類標本庫SAPAの貢献について紹介するコーナーは北大らしい企画でした。展示品では、18世紀後半に英国で出版されたキノコの彩色図と、同時期に蝦夷調査で描かれた『蝦夷採葉草木図』中の彩色図とが貴重なものでした。

また期間中には、キノコの生態や分類に関する博物館セミナーも開催されました。21世紀COE「新・自然史科学創成」事業、総合博物館セミナー「キノコの生態と分布」と題し、10月10日午後1時半～3時半、総合博物館1F「知の交流」コーナー

にて行いました。

題目は以下のとおりでした。
「アンモニア菌の生物地理的分布とその森林内での役割」

鈴木 彰(千葉大学教育学部教授)
「キンカク菌(子の菌類ビョウタケ目)の多彩な生活様式」

原田幸雄(弘前大学農学生命科学部教授)
総合司会 小林孝人(北大COE研究員)

また以上の企画展示やセミナーの内容を紹介した解説書『きのこの自然史』も刊行しました。

展示・セミナー担当:

高橋英樹(研究部教授/植物体系学)

小林孝人(北大COE研究員)

第8回企画展示 「北大の情景 北海道大学写真部写真展」

平成15年11月4日から11月29日まで、総合博物館の企画展示としては初めての、学生の文化活動の展示を行いました。北大写真部が、「北大の情景 北海道大学写真部写真展」と題して、企画から展示まで

主体性を発揮した発表展示となりました。休日には学生が展示解説もおこない好評でした。記念の絵はがきセットも作成しました。

なお、本博物館の企画展示室は、学内の学生文化サークル発表の場としても機能しています。希望サークルは顧問教官の署名とともに展示企画書を提出してください。

展示担当: 高橋英樹
(研究部教授/植物体系学)



農学部夜景

第9回企画展示 「小樽・札幌・北大キャンパスの 外来植物ー生物多様性と移入種問題」

第9回の総合博物館企画展示を「21世紀COE新・自然史科学創成」と銘打ち、北大総合博物館・小樽市博物館・札幌市博物館活動センターの共同企画として開催しました。期間は平成16年1月13日～4月18日で、場所は北海道大学総合博物館「知の統合」コーナーでした。

生物多様性に悪影響を与える外来種対策は現在、焦眉の急となっています。昨年10月には環境省の対策小委員会からの中間報告「移入種対策に関する措置の在り方について」がまとめられました。「在来種」と「外来種」とはどのようにして生態系の中で折り合いをつけていけるのか。そもそも「在来」と「外来」とを区別できるのかといった問題も含め、我々人間側の考え方を整理した早期の対策が求められています。今回は最も身近な札幌圏の外来植物に絞った展示を行い、生物多様性と移入種問題を考える契機としました。

本企画展示は、札幌圏をテーマとしていることもあり、大学博物館と地域博物館との初めての共同企画として計画されました。



札幌圏の自然史系博物館がさらに充実され、互いの長所を生かした連携が強化されるきっかけとしたいと思います。

展示開始の1月13日午前10時から、札幌市博物館活動センターの古沢仁館長、小樽市博物館の土屋周三館長の来賓を頂き、オープニングセレモニーがおこなわれました。

展示担当:
高橋英樹(研究部教授/植物体系学)
阿部剛史(研究部助手/海藻系統分類学)

また、企画展関連ミニシンポジウム「生物多様性と外来生物ー気づかないうちに変貌している身の回りの自然ー」が開催されました。

第1回は平成16年1月13日(火) 13:30より総合博物館1F「知の交流」コーナー

で北海道大学総合博物館・阿寒マリモ自然誌研究会共催/協力: まりも倶楽部の下、

「小樽で見られる外来生物」

小樽市博物館 山本亜生

「淡水生態系を脅かす国内最大級の外来底生生物ーウチダザリガニー」

旭川大学 斎藤和範

がおこなわれ、第2回として平成16年3月6日(土) 13:30より北海道大学総合博物館主催で、

「北海道における外来アライグマの現状とその影響」

北海道大学文学研究科 池田透

「北海道に移入されたサケ科魚類の現状と将来」

北海道立水産孵化場増毛支場 鷹見達也
が北海道大学総合博物館1F「知の交流」コーナーでおこなわれました。

シンポジウム担当: 阿部剛史
(研究部助手/海藻系統分類学)



第10回企画展示
「書とスケッチで綴る
『都ぞ弥生』展」

—北海道大学に通底する精神の芸術表現—

北海道大学総合博物館では企画展示「書とスケッチで綴る『都ぞ弥生』展」—北海道大学に通底する精神の芸術表現—を平成16年3月23日～5月9日の期間開催した。

「都ぞ弥生」に代表される北海道大学恵迪寮寮歌には、北海道の大自然の賛歌とともに歌い込まれている札幌農学校以来の北大に通底する精神の片鱗を見出すことができる。

今回の企画展示は北海道大学法学部卒で書家の岡田大岬氏と、北大遠友学舎講座「クラーク博士と札幌農学校の教育思想」受講生でスケッチ画家の高山緋沙子氏にお願いして、寮歌や本学キャンパスの建物等から題材を選んでいただき、本学に通底する精神を芸術で表現していただく試みとした。題して「書とスケッチで綴る『都ぞ弥生』展」。博物館1階廊下、および、知の交流コーナーの南側に、書20点、スケッチ20点を展示した。

また、4月10日(土)には山本玉樹本学元講師による関連公開セミナー「北海道大学に通底する精神」を行った。

本博物館には、クラーク博士から新渡戸稲造、内村鑑三ら、そしてその教え子らに受け継がれ、矢内原忠雄が「日本の大学教育の2つの源流の一つ、札幌から発した、リベラルな、人間を作る教育」と評した北海道大学に通底する教育精神の由来や継承を説明した資料や写真が展示されており、今回の企画展示と一体化して来館者には期待した以上の感動を与えた。

期間中の来場者は2500人を超え、会場に備えたノートに感動の声を寄せる人も多かった。

展示担当：藤田正一
(館長／獣医学・毒性学)

北大理学部教授室

「N123 (中谷宇吉郎研究室)」
の復元展示について



雪結晶の写真を調べる若き日の中谷宇吉郎
(北大理学部N123教授室) © U. N. Limited

北大総合博物館では、雪の研究の先駆者であり世界で初めて人工雪結晶を実験室内で作ることに成功し、一般にも「雪博士」として知られている中谷宇吉郎教授(元北大理学部)の偉大な業績と数多くの優れた研究者の輩出を称えて、2003(平成15)年7月に旧理学部本館内にある旧中谷宇吉郎研究室「N123」を復元し、展示公開を行うことになった。

本学の理学部は、1930(昭和5)年に旧帝国大学では東京大学、京都大学、東北大学に続き四番目に設置された。当時の札幌としては数少ない鉄筋コンクリートの建物であり、1927(昭和2)年11月に着工し1929(昭和4)年11月に竣工した。モダン・ゴシック風の建物で、正面玄関を入った中央階段の吹き抜けの上には「アインシュタイン・ドーム」と呼ばれる白天井のドームがあり、さらに周りの東南西北の壁にはそれぞれ朝、昼、夕、夜を象徴する「果物」、「ひまわり」、「こうもり」、「ふくろう」の浮き彫り(陶板製レリーフ)も見られる。今回復元された中谷研究室は、当時の一般的な北大の研究室の雰囲気を知る上でも役立っている。

1930(昭和5)年4月1日に理学部が正式に開部し、中谷宇吉郎は理学部物理学科の助教授として赴任した。発足当時の物理学科は、応用物理学(第一講座)、理論物理学(第二講座)、実験物理学(第三・四講座)の四講座が置かれることとなり、中谷宇吉郎は実験物理学第三講座を受け持った。その後、恩師寺田寅彦の言った「役に立つ研究」を始めるため新しい研究のスタートを切った。当初、中谷宇吉郎は電磁気学の講義担当や、英国で学んだ軟X線の研究および火花放電の研究などを行っていたが、その後研究の主題を「雪の結晶」に移して行った。そのきっかけとなったのは、アメリカの写真家ウィルソン・ベントレーが撮影した一冊の雪の結晶写真集との出会いであった。4,000枚以上にのぼる雪の結晶の写真は中谷宇吉郎に深い感動を与え、これが世界的な研究の契機となった。

中谷宇吉郎が研究をしていた理学部の各研究室には、白い陶器製の表示板に部屋番号が、またその下に鋼製のプレートで部屋の名称が掲げられている。中谷宇吉郎研究室の場合、部屋番号が「N123」でその下に「教授室」と掲げられている。ちなみに、部屋番号のアルファベットは方位を表しており、理学部正面玄関を入って左方向は南側で「S(south)」,そして中谷宇吉郎の研究室がある右方向は北側となるため、「N(north)」と表示される。次にアルファベットの右隣の数字一桁は階数を表し、中谷教授室は一階にあるため「1」となる。そして、最後に残った数字二桁は部屋番号を示しており、「N123」は「北側1階の23号室」となる。本来、「N123」の鋼製プレートは「教授室」と掲げられているはずだが、復元直前までは外された状態であった。これは、復元直前まで理学部の化学科が同室を会議室として使用していたためであり、一つの時期に外されたかは不明である(館内の「北大歴史展示・知との対話」にある中谷宇



復元されたN123研究室
左が中谷宇吉郎の机(複製)、右側が秘書の机

吉郎コーナーで上映されているビデオ「科学するところ」(石川県加賀市・中谷宇吉郎雪の科学館制作)には、「教授室」と書かれたプレートがまだ残っている。この外されたオリジナルの「教授室」プレートは、元理学部長の故三本木孝先生が保管されていたもので、現在は復元展示室のケース内に置かれている。以下、本研究室復元の経緯について紹介することにする。

*

中谷研究室の復元にあたっては、平成15年2月に博物館内での企画展示専門委員会において承認され、2003(平成15)年5月1日に関係者による中谷研究室復元に向けた企画会議を開催した。

この会議には、若濱五郎氏(北大名誉教授、元北大低温科学研究所所長)、菊地勝弘氏(北大名誉教授、秋田県立大学教授)、古川義純氏(北大低温科学研究所助教授)、遊馬芳雄氏(北大大学院理学研究科講師)、石澤たか子さん(元中谷研究室秘書)、そして総合博物館より松枝大治教授と博物館ボランティアの山崎敏晴氏が出席し、当時の研究室の復元方法や展示品の収集等について意見交換を行った。

「北大歴史展示・知との対話」にある中谷宇吉郎コーナー設置時と同様に、北大内には中谷宇吉郎教授関係の資料が少なく、復元には多くの方々からお力添えが必要となっ

た。特に家具・什器類(机、椅子、書棚等)は、本来であれば実際に中谷博士が愛用したものを全て揃え復元したいところであったが、中谷博士が北大を去ってから40年余りの時間が経ち、老朽化などのため廃棄処分になったものもある。その様な中でも多くの方々のご協力により、一つずつ展示用の家具類が探し出され揃ってきた。その中には、実際に中谷博士が使用していたものも寄贈され、関係者一同にとって大きな励みとなった。

中谷博士が亡くなった後、教授室、研究室等に残された膨大な資料のうち、直筆の原稿やプライベートなものは東京のご遺族に送られ、残された文書資料や雪の結晶写真の乾板類は、当時中谷門下で理学部地球物理学教室の気象学研究室教授であった孫野長治教授が預かることとなった。また、孫野教授が退官され亡くなった後は、同教室の後継者である菊地勝弘教授がこの資料の保管を引き継いだ。

当時、大学内には保存する場所や方法が決まっておらず、そのような折1994年に石川県加賀市(中谷宇吉郎生誕の地)に「中谷宇吉郎 雪の科学館」が建設されることになり、地球物理学教室に保管されていた各種資料類も加賀市へ移されることになった。その膨大な資料類の整理を行ったのは、中谷博士が亡くなった時に博士の下で助教であった故東 晃教授である(東教授は、この後工学部に新設された応用物理学科へ移る)。この時の記録によれば、概略ではあるが中谷博士自身の論文別刷、理学部紀要等がA4判のパンフレット・ボックスに8箱、和・英論文が21箱、その他に研究論文別刷が44個程あったとのことである。これらのことから、文書資料類は北大にはもう無いものと思われていたが、遊馬講師より加賀市へ送られた資料以外にも引き継がれてきた資料が有ることが判り、それらは全て博物館へ移管されることになった。また、それら以外にも中谷博士に関係する資料が新たに発見され、併せて移管を受けた。

復元に向けて、展示資料は少しずつながら揃い始めてきたが、ここで一番の問題は復元する研究室のレイアウトであった。中谷研究室については年代の違う何枚かの写真があり、また中谷門下の方や秘書の方のお話から理学部開学以降、中谷博士が亡くなるまでには何度か部屋の模様換えが行われた様で、どの年代の研究室を復元するかについて関係者の中で議論された。資料や記憶から一つのレイアウトを作製し、それを中谷先生の直弟子である樋口敬二氏(北大名誉教授、名古屋市科学館館長)や長野陽子さん(中谷研究室最後の秘書)に確認していただき、その結果昭和30年以降の教授

室を復元する方向で決まり、早速作業に取りかかることとなった。

「N123」には、書棚、木製黒板、つい立(実際に使用)というような家具類が次々と持ち込まれ、少しずつ研究室が復元されていった。最後までなかなか見つからなかったのは教授用の古い椅子であったが、これも偶然見つけ出すことができ無事研究室に収まった。その後、「中谷宇吉郎 雪の科学館」より移管を受けた研究机(レブリカ：孫野教授が中谷博士の使用机と同じものを作り、愛用していたもの)や写真乾板の整理棚(実際に使用)、また中谷家より中谷博士愛用のベレー帽とコートなどが届いた。その他にも、北大低温科学研究所助教授、古川義純氏のご協力により、ご自身が撮影された雪結晶の写真(カラー)をご提供いただき、これらを基にコルトンを作製し出来上がったものを研究室の上部窓ガラス枠に組み込んだ。最後は展示する文献資料類の整理であるが、現在着々とそれらの整理を進めている最中である。その中から展示用に整理したものや、珍しい資料についてここで少し触れておくことにする。

「Snow Crystals」の印刷原稿(展示中)が、旧地球物理学教室(現地球惑星科学専攻)に保管されていた資料の中から発見された。残念ながら本文原稿のほうは無かったが、完全に調査を終えていないものの、図表や写真類の原稿はほぼ全て残っていると思われる。この本は、1949(昭和24)年3月に岩波書店より出版された「雪の研究」の英語版を、中谷博士が企画し再編集を行って、1954(昭和29)年3月に「Snow Crystals : natural and artificial (雪の結晶：天然雪と人工雪)」と題して、本文308頁、写真図版188枚の大冊をハーバード大学出版部より出版した大著である。

次に、研究室復元以前までは旧理学部長室に飾られていた一枚のスキー板がある。これは中谷先生が実験に使用したもので、樋口敬二氏から寄贈されたものである。裏面には芳賀スキー製である刻印があり、聞くとところによると一対の片方は、大分県由布院の亀の井別荘「雪安居」の扁額とされているとのことである(亀の井別荘「雪安居」は、中谷博士の甥である中谷健太郎氏が経営している)。

また、中谷博士がニセコ山中で実施したゼロ戦の着氷実験のための風洞装置の青写真も、旧地球物理学教室に残っていた資料の中から今回の展示準備中に発見され、現在は復元展示研究室内で展示公開されている。

さらに、中谷博士自身が書いたもので、当時この研究室に飾っていた「ロンドン・



中谷宇吉郎著「Snow Crystals」とその図版・写真原稿

キングスカレッジ」と題された絵画がある。今回、これも中谷家より寄託を受け再び研究室に飾られることになった。また、展示室内で上映している映像「開けゆく北極」では、中谷博士最後の講演(1959年)を聞くことが出来たり、その他にも開学当時の研究室風景を撮影した貴重な映像も見ることが出来る。この他、中谷博士の研究は雪の結晶だけに留まらず、凍上の研究、霧の消散や着氷についての研究、また戦後は農業物理学として融雪促進の研究、大雪山系などに於ける水資源の研究、そして晩年は氷の単結晶の研究へと進む。今回の復元研究室では、これらの研究に関わる以下のような各種報告書の展示も行っている。「大雪山水系及び洪水の研究」財団法人農業物理研究所1950(昭和25)年、「根室付近霧調査研究演習第1次報告・要約編」発行所・発行年不明、「氷の単結晶の変形」金属物理1958(昭和33)年、単行本「北極の氷」宝文館1958(昭和33)年など。

中谷博士の研究場所は、人工雪の研究に関しては専ら当時理学部の隣に併設されていた常時低温研究室で行われていた。現在では、その場所に「人工雪生誕の地」の記念碑が建てられ、いまでも多くの人が訪れている。また、ニセコや根室などでも多数の研究成果を挙げたが、戦後は道内に留まらず海外の地でも活躍していた。しかし、少し違った視点で見ると、全てはここ「N123」研究室から中谷博士の研究が始まったことになり、その意味においても中谷研究の原点であると言えるのではないだろうか。「N123」研究室が復元され、中谷博士の精神とともに永く次の時代にも受け継がれていくことは、中谷門下だけに限らず、日本の雪氷学史上においても貴重な財産となるであろう。(詳細については、カタログ「北大理学部教授室N123中谷宇吉郎研究室」を参照)

展示担当：

松枝大治(研究部教授/鉱物学・鉱床学)
山崎敏晴(総合博物館ボランティア)

第8回公開シンポジウム 「深海魚の多様性」

総合博物館では深海性種を多く含むカサゴ目クサウオ科魚類の専門家である、ロシア科学アカデミーのDmitry L. Pitruk博士を客員教授として招聘したのを機に、2003年12月10日に第8回公開シンポジウム「深海魚の多様性」を開催しました。

本シンポジウムは大学院水産科学研究科との共催で、本学函館キャンパス第2研究棟特別講義室で行いました。

はじめに総合博物館松枝大治研究部長および水産科学研究科の猪上徳雄教授の挨拶を頂き、次に以下の5題の講演が行われました。

「深海魚—特殊な環境に適応した生物たち—」

今村 央（北海道大学総合博物館）

「世界のヘラサメ属魚類の多様性」

仲谷一宏（北海道大学大学院水産科学研究科）

「深海の釣師・アンコウ目魚類の多様性」

島崎光臣（北海道大学大学院水産科学研究科）

「ソコダラ科魚類の多様性」

遠藤広光（高知大学理学部）

「北太平洋産の深海性クサウオ科魚類の多様性」

Dmitry L. Pitruk（ロシア科学アカデミーウラジオストク海洋生物学研究所・北海道大学総合博物館客員教授）

総合討議 進行・司会：

今村 央（総合博物館）・矢部 衛（大学院水産科学研究科）

当日は水産科学研究科の学生や一般市民も含めた約80名が集まり、普段見ることのできない深海魚の様々な形態やユニ

ークな生態が紹介されました。また、深海魚について理解されている事はむしろ少なく、わかっていないことの方が多いことを再認識することができ、大変有意義なシンポジウムとなりました。

シンポジウム担当：今村 央
（研究部助手／魚類系統分類学）



講演中の Dmitry Pitruk 博士

佐瀬秀男氏樺太植物標本の寄贈

福島県郡山市に在住されていた故佐瀬秀男氏の樺太植物標本が、昨年11月末に本館に寄贈された。標本は丁寧に作成されており、標本ラベルもしっかりとしたものだった。

佐瀬氏は1913年（大正2年）のお生まれで、昭和8年に樺太庁教員講習所を卒業されたあと、昭和20年まで、樺太の遠洲、上喜美内、楠溪、清川といった高等小学校、国民学校の教員を勤められた。この間、樺太において動植物、地学標本を収集された。

昭和20年に応召され、シベリアでの収容所生活を経験された後、戦後は福島県各地の小学校に勤められた後、1971年（昭和46年）に退職された。その後も福島県

植物誌の編集委員、環境庁版植物レッドデータブックの調査委員などを勤められ、2001年（平成13年）に亡くなられた。

なお、郡山愛草クラブ会誌『かたくり』に、佐瀬氏のお人柄を偲ばせる樺太での植物観察記録が載せられている。

本博物館の樺太・千島列島産植物標本コレクションは、日本ではもっとも充実しており、今後さらなる北方植物の研究発展を計る上で、大変重要な標本群が寄贈された。御遺族の御判断に改めて敬意を表したい。

寄贈者の佐瀬おのぶさん、また標本送付の労をとっていただいた民井紘子さんに感謝します。また、本件について御尽力いただいた、福島大学教育学部の黒沢高秀氏にも感謝致します。

なお、植物標本に併せて地学標本についても寄贈されました。記して感謝申し上げます。



佐瀬秀男氏採集樺太標本リシリビヤクシン

高橋英樹

（研究部教授／植物体系学）

客員教授紹介

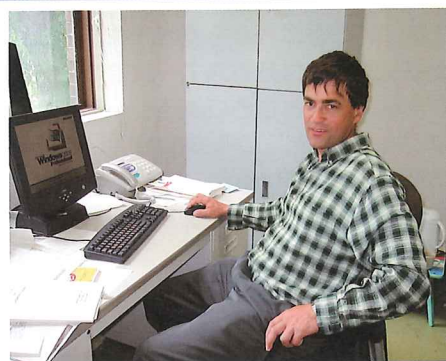
総合博物館では第8代客員教授として、構造地質学が専門のプスロフ博士が1月28日着任しました。

8月1日までの滞在期間中は「アジア大陸の形成過程とその変遷の構造地質学的研究および北海道との構造論的比較」を課題として、総合博物館と本学関係研究者との共同研究を行います。

今回で4回目の来日となりますが、5ヶ月をこえる長期滞在は今回が初めてです。

氏名：Mikhail Mikhailovich Buslov

略歴：1956年ロシアノボシビルスク州モ



シュコボ生まれ。1978年国立ノボシビルスク大学地質学科卒業。同年10月よりシベリア地球物理調査所技師。1979年8月よりロシア科学アカデミーシベリア支部地質学地球物理学研究所所属。現在、同支部

地質学・地球物理学・鉱物学総合研究所主任研究員。

7月12日～13日には本学大学院理学研究科地球惑星科学専攻在田一則教授主催のヒマラヤシンポジウムに参加しました。

また7月14日には、第9回総合博物館シンポジウムとして「アジア大陸の成長と変形」についての国際シンポジウムを主催しました。本シンポジウムには演者として日本以外のベルギー、スイス、ロシアの3名を含み、7つの課題についての発表が行われ盛会のうちに無事終了しました。

箕浦名知男

（研究部助教授／古生物学）

平成15年10月から平成16年3月までにおこなった各種セミナー

第46回 北大総合博物館セミナー 「きのこの自然史」展関連セミナー「キノコの生態と分布」

「アンモニア菌の生物地理的分布とその森林内での役割」

鈴木 彰（千葉大学・教育学部・教授）

「キンカク菌（子のう菌類ピョウタケ目）の多彩な生活様式」

原田幸雄（弘前大学・農学生命科学部・教授）

日時：10月10日（金曜日）13:30～15:30（参加者67名）

第47回 北大総合博物館セミナー 土曜市民セミナー

「草を食べる動物たち－牛の不思議、馬の不思議－」

近藤誠司（農学研究科・教授）

日時：10月11日（土曜日）13:30～15:00（参加者46名）

第48回 総合博物館セミナー

21世紀COE「新・自然史科学創成」総合博物館・市民セミナー

「深海底に湧く温泉－その化学と生態系の謎に迫る」

蒲生俊敬（理学研究科・教授）

日時：10月25日（土曜日）13:30～15:00（参加者約60名）

第49回 総合博物館セミナー 土曜市民セミナー

21世紀COE「新・自然史科学創成」総合博物館・市民セミナー

「ユキムシとその仲間たちの生態と進化」

秋元信一（農学研究科・助教授）

日時：11月8日（土曜日）13:30～15:00（参加者83名）

第50回 総合博物館セミナー

21世紀COE「新・自然史科学創成」総合博物館・市民セミナー

「海的环境変化が海鳥の生活を変える」

綿貫 豊（水産科学研究科・助教授）

日時：11月15日（土曜日）13:30～15:00（参加者約70名）

第51回 総合博物館セミナー

21世紀COE「新・自然史科学創成」総合博物館・市民セミナー

「ロシアにおける更新世後期マンモス動物群の研究と今後の課題」

ゲナディ・バリシュニコフ（ロシア科学アカデミー動物学研究所・主任研究員）

日時：11月20日（土曜日）13:30～15:00（参加者約50名）

第52回 北大総合博物館セミナー

「海洋生物学研究所（ロシア科学アカデミー極東支部）の紹介」

ドゥミトリー L. ピトルク（総合博物館・客員教授）

日時：12月12日（金曜日）15:00～16:30（参加者39名）

第53回 北大総合博物館セミナー 土曜市民セミナー

「天から送られた手紙－雪の結晶の形を読み解く－」

古川義純（低温科学研究所・助教授）

日時：12月13日（土曜日）13:30～15:00（参加者61名）

第54回 北大総合博物館セミナー

21世紀COE「新・自然史科学創成」総合博物館・市民セミナー

「電子顕微鏡で見る地球内部の物質」

藤野清志（理学研究科・教授）

日時：12月20日（土曜日）13:30～15:00（参加者約50名）

第55回 北大総合博物館セミナー 土曜市民セミナー

「宇宙はどのようにして形成されてきたのか」

羽部朝男（理学研究科・助教授）

日時：1月10日（土曜日）13:30～15:00（参加者71名）

第56回 北大総合博物館セミナー

21世紀COE「新・自然史科学創成」総合博物館・市民セミナー

「古代DNAと自然史研究・生物進化学と地球科学の接点」

増田隆一（先端科学技術共同研究センター・助教授）

日時：1月24日（土曜日）13:30～15:00（参加者約70名）

第57回 北大総合博物館セミナー 土曜市民セミナー

「『雲を掴む』ような研究」

藤吉康志（低温科学研究所・教授）

日時：2月14日（土曜日）13:30～15:00（参加者約60名）

第58回 北大総合博物館セミナー

21世紀COE「新・自然史科学創成」総合博物館・市民セミナー

「ヒマラヤ氷河湖の拡大と地球温暖化」

知北和久（理学研究科・助教授）

日時：2月21日（土曜日）13:30～15:00（参加者約60名）

第59回 北大総合博物館セミナー

公開講演会「人類とクマ」

「最初の神としてのクマ」

J. D. Lajoux（CNR フランス国立科学研究所／民族学）

「極東の熊送り儀礼」

谷本一之（北海道立北方民族博物館館長）

日時：3月6日（土曜日）13:30～17:00（参加者約50名）

第60回 北大総合博物館セミナー 土曜市民セミナー

21世紀COE「新・自然史科学創成」総合博物館・市民セミナー

「藻類に見る植物の進化・多様化－マラリヤ原虫は昔、藻類だった」

堀口健雄（理学研究科・助教授）

日時：3月13日（土曜日）13:30～15:00（参加者75名）

第61回 北大総合博物館セミナー

21世紀COE「新・自然史科学創成」総合博物館・市民セミナー

「海の名も無き生き物たち－紐形動物の世界」

柁原 宏（理学研究科・助手）

日時：3月20日（土曜日）13:30～15:00（参加者56名）

企画展示のお知らせ

第13回北大総合博物館企画展示「北海道の歴史的建築図面展」が、7月21日から9月5日までの予定で開催されています。ご来館をお待ちします。

第14回北大総合博物館企画展示「恵迪寮展」が9月14日から10月24日までの予定で開催されます。ご来館をお待ちします。

この他、総合博物館の企画展示に関するご希望やご質問がありましたら、総合博物館事務室にお寄せ下さい。

平成15年10月から平成16年3月までの主な出来事

10月 2日	サウジアラビア王国最高ウラマー評議会一行 見学(15名)	平成16年 1月13日	第9回企画展示 「小樽・札幌・北大キャンパスの外来植物ー生 物多様性と移入種問題ー」(4月18日まで) 企画展関連ミニシンポジウム「生物多様性と 外来生物ー気づかぬうちに変貌している身 の回りの自然ー」(第1回)
10月 3日	札幌開成高等学校PTA一行見学(30名)		
10月 6日	第7回企画展示「きのこの自然史」(11月 1日まで)		
10月 7日	全道高等学校図書研究大会一行見学(50名)		
10月 8日	文部科学省研究振興局一行視察(6名)		
10月 9日	第2農場臨時公開(10月13日まで) (のべ1,721名)	1月28日	第8代客員教授M. M. プスロフ博士(構造 地質学) 着任
10月 9日	国立七大学教務事務所管課長協議会一行見学 (20名)	1月30日	韓国慶北大学学長見学(3名)
10月 11日	大阪清教学園高等学校生徒見学(324名)	2月 5日	インドネシア鉱物資源局Ratih Sukmawardany氏 (訪問研究員) 来館
10月 18日	広島県如水館高等学校生徒見学(191名)	2月 6日	インドネシア2等書記官見学(2名)
10月 22日	広島市銀河学院高等学校生徒見学(64名)	3月 5日	駐日英国大使見学(1名)
10月 30日	札幌新川高等学校PTA一行見学(33名)	3月 6日	企画展関連ミニシンポジウム「生物多様性と 外来生物ー気づかぬうちに変貌している身 の回りの自然ー」(第2回)
11月 4日	第8回企画展示 「～北大の情景～北海道大学写真部写真展」 (11月29日まで)	3月23日	ロシア・イルクーツク大学一行見学(3名)
11月 10日	総合博物館入館者数10万人達成	3月23日	第10回企画展示「書とスケッチで綴る都ぞ 弥生」(5月9日まで)
11月 15日	札幌大学学芸員課程博物館見学実習(46名)	3月29日	76年ノーベル医学賞受賞者Carleton Gajdusek 氏来館
11月 28日	北海道大学OB学長懇談会一行見学(10名)		
12月 10日	鹿児島県立出水高等学校生徒見学(220名)		
12月 12日	福山市立福山高等学校生徒見学(120名)		

お知らせ

●第11回企画展示「新着コレクション展 化石鉱物コレク
ション」は5月18日から6月20日まで開催されました。●第
12回企画展示「ストックホルム水質と北海道大学水研究の系
譜」は5月25日から7月4日まで開催されました。●展示解説
書「Island Arc」(英語版)、「北大理学部教授室N123 中谷宇吉
郎研究室」、「北海道大学に通底する精神と教育思想の歴史」が
出版されました。●第5回展示「魚類の多様性」と第7回企画
展示「きのこの自然史」の展示解説・図録が出版されました。
●21世紀COE「新・自然史科学創成」との共同編集で、『北大
自然史タイプコレクションー128年知の伝承』が出版されまし
た。ご希望の方には差し上げます。●博物館研究報告2号
『Biodiversity and Biogeography of the Kuril Islands and Sakhalin
1』が出版されました。



お礼

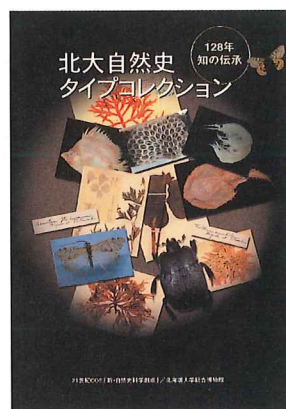
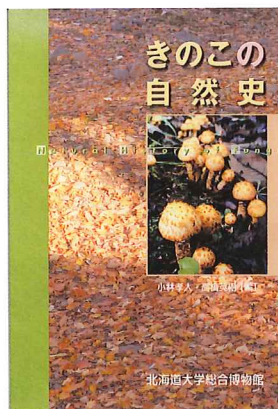
以下のボランティアの方達に、学術標本作製・展示解説・企
画展示準備・ボランティア運営等で協力いただきました。謹ん
でお礼申し上げます(平成15年10月～平成16年3月)。
植物標本: 今村ひろこ、小池武子、小淵修子、金上由紀、桂田
泰恵、久志本アイ、黒田シズ、高橋美智子、高橋陽子、竹林順
子、近久喜枝、千坂瑞希、引地輝代子、矢島慶子、与那覇モト
子、Erni Susanti, Maria Stefanie。
昆虫標本: 久万田敏夫、梅田邦子、石田孝英、問田高宏、大島
一正、小林憲生。
古生物学: 望月直、相原大介、中野系、蛭田明宏。
考古学: 笠原明子、前田志乃、長屋恵、ロバート・クルツ。

鉱物学: 鳥本准司、山崎敏晴、吉岡修司、藤川修、永富真紀子、
甕聡子。

展示解説: 清水良平、塚本精蔵、岡田美佐子、上田若菜、長谷
睦。



21世紀COE「新・自然史科学創成」が、本博物館との共同
で、本年度より「パラタクソノミスト養成講座」を始めます。
詳しくはCOE ホームページをご覧ください。



北海道大学総合博物館ニュース 第9号

北海道大学総合博物館ニュース

編集: 高橋英樹・松枝大治

発行日: 2004年(平成16年)7月・発行者: 藤田正一

発行所: 北海道大学総合博物館

住所: 060-0810 札幌市北区北10条西8丁目

電話: 011-706-2658・FAX: 011-706-4029

E-mail: museum-jimu@museum.hokudai.ac.jp

http://www.museum.hokudai.ac.jp/

印刷: (株)アイワード